広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代日本人のお見合い : 結婚に至るまでのその役割と意義
Author(s)	ジェニー イー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1993 : 127 - 142
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039536
Right	
Relation	

現代日本人のお見合い

― 結婚に至るまでのその役割と意義 ―

ジェニー・イー

序文

日本人がなぜ結婚に関してこんなにひどいコンプレックスをもっているのか、と考えたことがありますか。ただ書店に入りさえすれば、すぐ結婚について本と雑誌がぎっしり並んだ本棚を見つけることができる。その多くの本は、相性テストで占められていた。（雑誌一冊に「恋愛能力総点検」や「SEX嗜好検証」などのようなテストが15種類もあるものもあった。）

一生独身でいるということが重も悪いことであるという孔孟の教えについてヘンドリ[1]は言及した。結婚することによってはじめて一人前になったと認められる日本人社会において、結婚は、人生の重要なステップであると信じられている。「結婚しないことは、非人間的なことである」という考えを特に女性は強いられている。日本女性にとって、結婚すること、特に適齢期に結婚することに対して、社会的圧力がかかる。娘を嫁がせるのも母親の責任の一つであり、嫁がせることができなかった場合、母親自身が非難される。アンケートに応じてしれた数人の母親は、娘が、25･6歳になっても結婚の話がない場合は、見合いの準備を始めると答えた。

しかし、この十年で若い日本女性の行動、態度は変わってきた。デート、同棲、晩婚、離婚について西洋的価値観が受け入れられてきている。さらに平均結婚年齢は高くなってきている。これにはいろいろな理由がある。

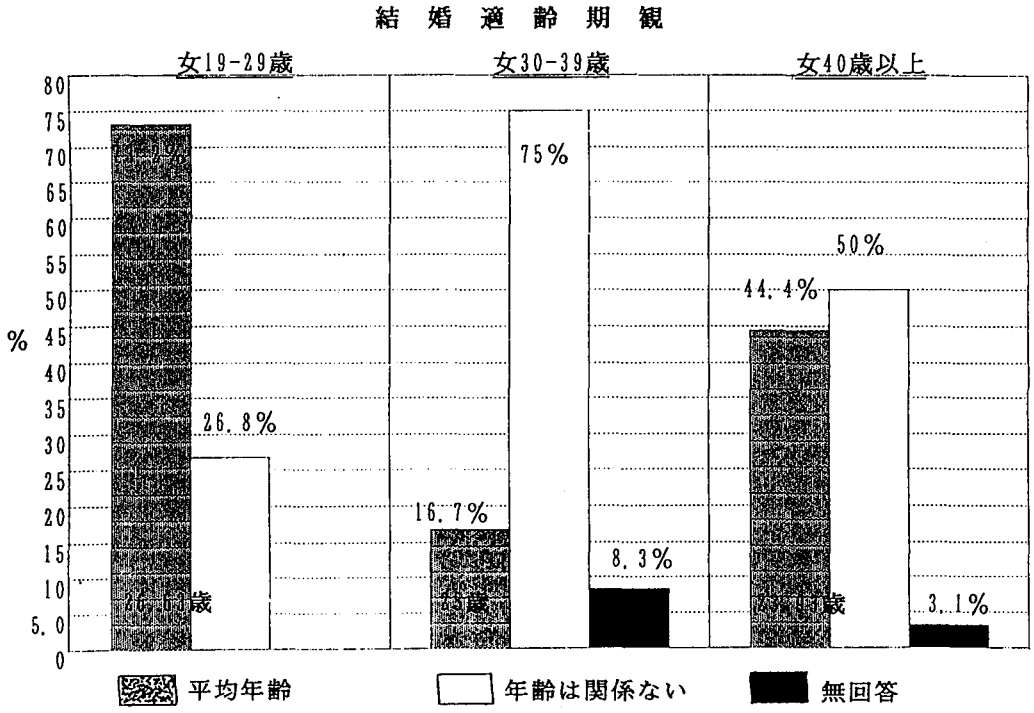
キャリアに満足している多くの女性は結婚について「自由を奪うもの」「犠牲になること」と考えている。「結婚とは人生の墓場」という文句もよく聞く。「平成夫婦進化論（朝日新聞社）」[2]から次のような文を見つけることができた。「仕事を続けるために、40人の男性と見合いをして結婚した女性もいる」「もっと自分の人生を生きてほしい」。また、皇太子と雅子様の結婚により、女性の結婚適齢期に対する考えが変わるだろうかという議論もある。雅子様が結婚を決めた29歳という年齢が一つの新しい基準となって、女性の結婚を考える時期が遅くなっていくかもしれない。

19歳から78歳の120人を対象として行なったアンケートでは、「何歳で結婚をするのが一番いいと思いますか？」という質問に、男性の71.9％の答えは平均28歳、25％が「年齢

[1] HENDRY, Joy 1981 "Marriage in Changing Japan" Charles E Tuttle Co. Inc p. 18

[2] 朝日新聞社 1993 朝日ワンテーアマガジン⑤ 「平成夫婦進化論」 p. 74

は関係ない」、3.1%が「無回答」という答えであった。女性の平均結婚年齢は少し低く、59.3%が平均26.15歳、38.4%が「年齢は関係ない」、2.3%が「無回答」と答えた。多数の男性が遅く結婚する主な理由は「経済・精神的安定」というのが多かった。数人の女性が「ある程度キャリアを積んでから結婚したい」と考えるものが多いという答えが示されている。だが、30歳を越えると出産が大変だと考える女性も多い。この場合、早く結婚すればいいではないか。しかし自分の運命を変えられると信じる人々は少なく、結局、結婚するにふさわしい相手がいれば、その時は、年齢にこだわる必要はないという意見が示される。さらに注目される結果を示したのが下図である。



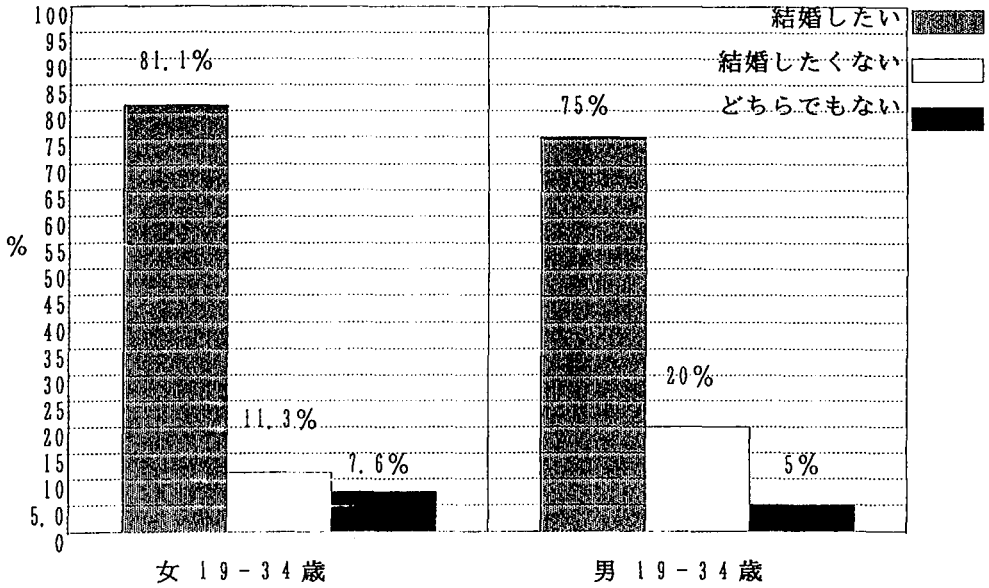
19-29歳と40歳以上のグループにおいては、平均結婚年齢2.7歳の差がある。これは、このごろの若い女性の結婚に対する考え方が40年前の女性のそれと異なっていることを表している。昔の日本では、結婚は、子供を得るための手段として考えられてきた。一方で、現代日本では、キャリア、恋愛、幸福などが結婚を決定する上での重要要因となっている。このごろの女性はただ結婚するための不幸な早婚であれば喜んで断る。その代わりに、「ふさわしい」相手と出会うために慎重にその人を探している。「平成夫婦進化論（朝日新聞社）」[1]によれば、「結婚相談所を訪れる女性は多少の違いはあっても、「出会いの

[1] 朝日新聞社　1993　朝日ワンテーママガジン⑤　「平成夫婦進化論」　p.72

機会」がないからというより「理想の相手にめぐりあいたいから」というほうが多い」。しかし一方男性の多くは、女性と「出会うチャンスがない」という。学校、職場の中における男女比のアンバランスが一つの原因である。もう一つの理由は、男性は、働き始めたら彼らの社会生活は多くの場合、職場に限定されているし、働く時間も長く、通勤も大変で、転勤も多く、なかなか女性と交際する機会がないからである。また、「平成夫婦進化論」[1]の中で「「花婿学校」（週1回210分授業）に集まった男性の多くは、女性の象徴的な結婚の理想相手といわれた「三高」（収入、学歴、身長が高い）の人達だった。そして彼らが抱えていた課題は「いい結婚相手にめぐりあいたい」としながらも主に「女性のこと（考えや生き方）を知りたい」「結婚について考えてみたい」．．．」などということであった。しかしながら、The Japan Times[2]のアンケートでは、この「三高」は、今や、結婚相手を選ぶための最も重要な条件ではなくなったとしている。それに代わって、現在では、相手との価値観の一致が重要となってきている。男性の81.4％と女性の89.6％がこういう理想を選んだ。

私が行なったアンケートでは、19-34歳のグループにおいては、女性の81.1％と男性の75％が「結婚したい」と答えた。

結　婚　へ　の　意　志



結婚したいと答えた女性男性に「なぜ結婚したいのか」という質問をした結果を示した

[1] 朝日新聞社　1993　朝日ワンテーママガジン⑤　「平成夫婦進化論」　p.71

[2] The Japan Times　Sunday June 27, 1993　p.19

のが以下である。

結婚したい理由

女19-34歳

・一生一人より二人のほうが楽しい／好きな人にそばにいて欲しいから. .	41.9%
・楽しい家庭を作りたい／子供が欲しいから.	32.6%
・精神的、経済的な支えが必要だから.	11.6%
・無回答.	11.6%
・好きな人がいるから.	2.3%

男19-39歳

・老後一人で暮らすことを考えると寂しい／好きな人と一緒にいられる. .	33.3%
・家庭を作りたい.	26.7%
・結婚したいから／結婚するのが当たり前だから.	20.0%
・好きな人がいるから.	13.3%
・精神的安定.	6.7%

結婚したくないと答えた人々は、次の理由をあげていた。「結婚で自分の人生に制限を設けたくない」、「もっともっと遊びたい」、「まだ若い」、「まだ結婚が何なのか分からないから」。さらに「最近の男は頼りないので. . . 」と答えた女性も一人いた。

19-34歳の日本人の多数は結婚したいと考えているのだが、ふさわしい相手を出会う機会の少ない日本社会では、結婚相手を選ぶ際、見合い結婚と恋愛結婚の二通りの方法がある。

「お見合い」の意味

上に言及したように婚約前の儀式的行事は恋愛かまたは見合いと一般に分類している。一番純粋な形の恋愛結婚は、男と女がめぐり合い、恋に落ち、誰にも仲介させず結婚を決めるケースである。見合いには二つの意味がある。広義に解すれば、恋愛結婚に対する見合い結婚であり、。狭義に解すれば、お互いを紹介する式を意味する。（見合いは「お互いに見る」という意味である。柳田国男[1]によると、見合いという言葉は元は「めーあい」（新婦になる女性と合う）の意味であった。ここで「見合い」とは、後者の方を指すことにする。

見合いというのは、本人二人の自由恋愛によって結ばれるのではなく、「仲人」と呼ばれる媒酌人の紹介で結ばれる。息子、または娘が、適齢期に達すると、家族の人々は、見

[1] YANAGIDA, Kunio 1957 "Japanese Manners & Customs in the Meiji Era" Translated and adapted by Charles S Terry Tokyo:Obunsha p.174

合い相手を紹介してくれるように、友人と親類を慎重に問い合わせる。たいていの場合、適齢期の息子や娘を持った親が、本人の写真や履歴書を添えて、仲人に相手探しを頼む。履歴書の書き方例が下に書いている。

履歴書

真田広え長女

真田智恵美

昭和○○年○月○日生

現住所　大阪市福島区大開三丁目六番二号

職歴　昭和○○年胃第一産業株式会社入社

現在に至る

賞罰なし

覚え書

趣味　読書、旅行、テニス

特技　自動車運転免許

身長　一メートル六〇センチ

体重　五二キロ

既応症　なし　健康状態良好

家族　父広え○○歳太陽建設本社勤務

母暁子○○歳

妹繭　○○歳中央病院会計課勤務

履歴書の書き方に特別な決まりはないが、必ず本人の自筆で、丁寧に書いたものである。本人の氏名、生年月日、現住所、職業などを記入する。普通、身上書も書く場合が多く、履歴書のあとに続けて書いても、別紙でもかまわない。一般に、身上書には、趣味、免許、資格の有無、健康状態、家族構成などを書く。男性の場合は、収入、扶養者の有無も含めて記入する。見合い写真はと言えば、最近は正式な写真とともに、スナップ写真を2-3枚添えるのが普通である。縁談では、見合い写真によって印象が大きく左右される。

仲人はこれを職業としている人か、あるいは、親類か社会的に親用が高く、かつ結婚適齢期の男女についての情報を豊富に持っている人である。仲人は、まず選び出したカップルが良縁を得ることができるかどうか確かめる。そうするために、双方の年齢、性格、家族構成と身分などの資料を十分に斟酌する。適当な相手が見つかったところで双方の親も同席して、顔合わせの見合いとなる。見合いは、レストラン、喫茶店、ホテル・ロビー、場合によっては、女性側の家などでも行なわれる。しかし、見合いはどこで行なわれても、仲人が話のきっかけを作ることが必要で、それが見合いを上手に進める「こつ」と言える。見合いで趣味や最近のニュースなどを語り合って、自分の結婚相手にふさわしいかどうかを判断するのである。初対面では、第一印象がとくに大切ですが、自分には合わないと思ったときは、できるだけ早く仲人にその気持ちを伝えることが一番重要である。見合いの返事は、二、三日してからか、遅くとも一週間以内にするようにする。双方が互いに相手を気に入り、見合いの結果が成功すれば、しばらく交際して、結婚するかどうかを決める。アンケートに応じてしれた一人の主婦は、見合い後の交際する期間が2年間であったとい

うことである。けれども、このケースは交際する期間の一番長いものである。通常は、6ヶ月が最高のである。井田良彦[2]は、「交際する期間は、3ヶ月を目安とします。長くてもせいぜい6ヶ月で、それ以上長引かせると断るにも見合いが悪くなってしまいます」と書いた。

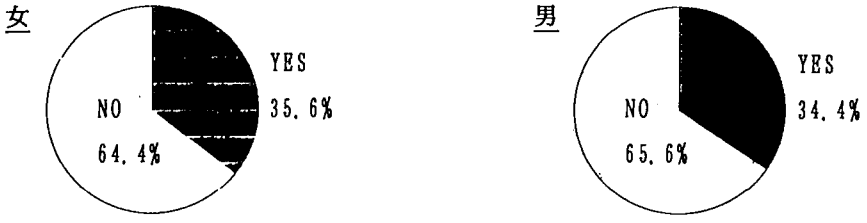
また、「下見合い」という言葉もある。これは、男性の方が、正式な見合いの前に相手の女性の日常の姿をこっそりうかがうということである。女性にとっては、男性に対して評価する機会が少なくなるが、女性側の面目をつぶさない方法とも解することができる。

過去の数年で、見合いの形式はずいぶん変わってきた。明治時代の見合いは、通常、身元を調査した後に見合いを行ない、見合い後は、ほとんどの場合、見合い相手と結婚することになった。しかし現在では、見合いは選択の場で、試行錯誤しながら、縁談がまとまるまで、何回も見合いをするのは珍しくない。アンケートでは、見合いの経験がある女性の中で、結婚するまで見合いの数は平均3.1で、少ない人で1回、多い人で8回である。一方、男性の平均見合い数は2.2回で、少ない人で1回、多い人で6回である。

最新形式の見合いは、さらにカジュアルである。お互いに面識を持つための一つの機会となっている。西洋の「ブラインドデート」と同じように人気が高い。友人、親類、や媒酌人の紹介による男女のデートだが、出会う時から第三者の仲介のイニシアチブに頼らず、彼らお互いに心を奪うように勧めるのは二人の義務である。こうした出会いの機会をつくる、コンピュータを使ったパートナー紹介システムがある相手斡旋所などのサービスが多い。もし、土曜の夜の11時に「フジテレビ」を見たら、大変面白い「ねるとん紅鯨団」と言うデート番組がある。その番組に出演した女性一人が「彼は面白すぎるから．．」と言って相手を断ったことをまだはっきりと覚えている。まさか、そういう言い訳は信じにくいだろう！こういう番組や結婚相談所がかなり多いが、アンケートの対象者は「結婚斡旋所やねるとんパーティー等によるお見合いを経験したことがありますか？」という質問に対し、わずか、1.7%それも19-24歳の女性しか経験をもっていなかった。結婚する機会を与えうる日常の人間関係から、しばしば仲介者がでてくる。例えば、「親類関係」では、一番活躍するのが、父親や兄弟で次に母親、おばである。また、「近所」「顧客」「友達」「職場」においても仲介者はでてくる。現在では、特に「友達」「職場」関係で日常の接触が多いため、この二つからよく仲介者が現われる。

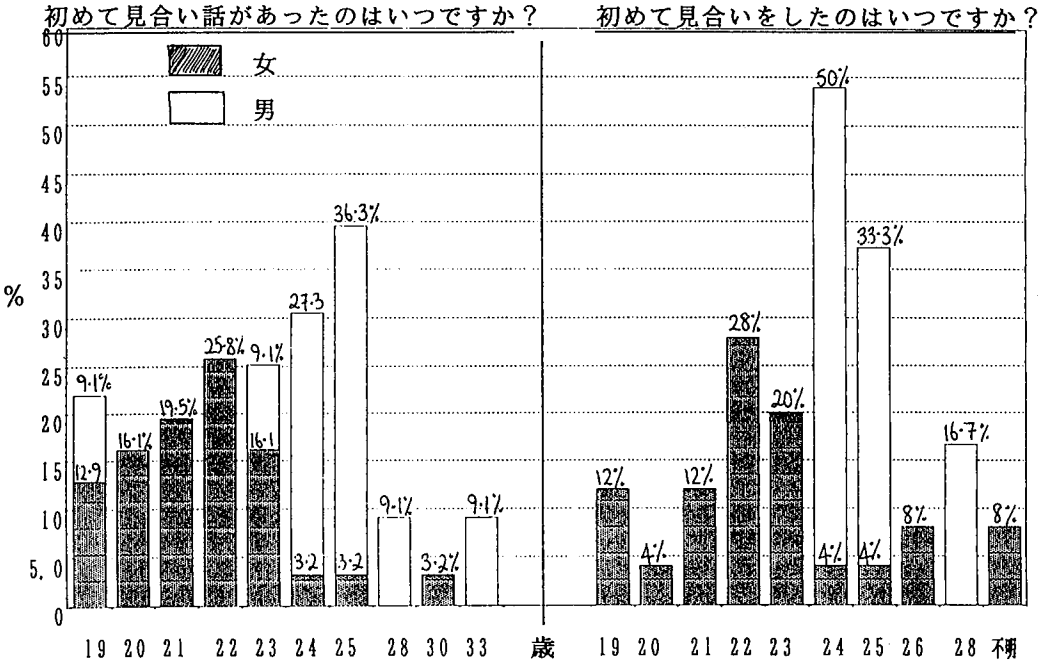
下の図は見合いの話をしたことがあるアンケートの人数を示している。

今までにお見合いの話が持ち上がったことがある？



[2] 井田良彦　1986　「見合い・結納・結婚のマナー」　東京：株式会社

「いいえ」と答えた女性の89.29%が19-24歳で、「はい」と答えた女性の80.65%は30歳以上である。男性にしてみれば、19-24歳で見合いの話をしたことがあるのは33.33%と低く。30歳以上で「はい」と答えた男性は90.91%にものびる。「はい」と答えた男女は、何歳で見合い話があったのか、それとあとに続くて、初めて見合いをしたのはいつかということについて下の図で示してみた。

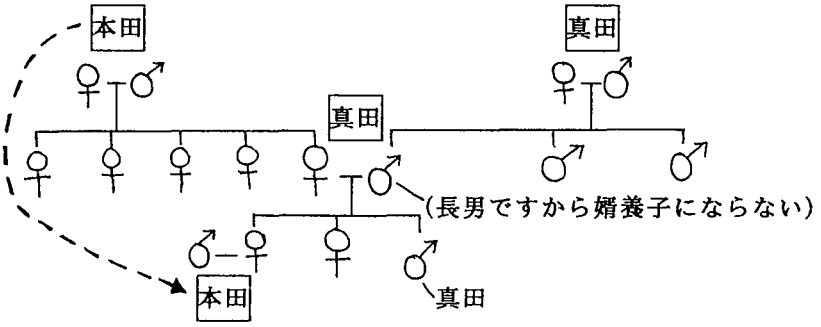


対象者全体においては、女性28.7%と男性18.8%が見合いをしたことがある。この百分率は、見合いの話がある女性80.6%と男性54.5%で計算した。上図を見ると、女性の方が早めに見合い話を持ちかけられる傾向を示している。見合いを経験する平均年齢は理想的な結婚適齢期前1-2年以内であると思う。だが、右のグラフの平均年齢は理想的な平均結婚適齢期（男性28歳、女性26.15歳）より約三年低い。これには、次の二つの理由がある。まず第一に、見合いの話があった人々では、女性の80.65%と男性の90.91%が30歳以上であるということ。それと結婚適齢期観を振り返って見れば、30歳以上の女性のグループにおいては理想的な結婚適齢期が平均のより低いはずと一般に考えられている。さらに第二に、年齢差はアンケート対象者の多くが結婚する前に、見合いを最低一回以上はしているということで説明ができる。実は、見合いをした男性の100%と女性の76%は、結局見合い結婚をした。残りの女性では、20%がまだ結婚していない、そして4%が見合い結婚でなく、恋愛結婚をした。ある女性は、見合いを2回した後、結局は職場の男性と恋愛結婚をした。しか

し親はこの恋愛結婚には大反対だったと言う。

見合いにおける、親の役割は重要である。見合いをする時まず誰と相談しましたかと聞くと、親が83.9%、友人6.5%、親戚6.5%と無回答が3.1%の答えが出た。12.9%の人々が、見合いをした理由として「親の勧め」と答えたが、注目すべきは、6.6%がこういう事に仕方がなかったと答えた点である。この問題について、「親からうるさく言うから」「父母から早く結婚するよう要求した」などのような回答が出た。しかし、全部の解答が否定的であったわけではない。「結婚したいから」というのは最も多い答えで、次に「人と合うことができる」「会社の上司の勧め」「経験したかったので」「見合い結婚が日本では多い」などというのが多かった。

最後に、見合いに親が果たす役割についてであるが、見合いと日本の「家」制度、特に継承との深い関係を反映していると考えられる。姉妹ばかりがいるアンケート対象女性の数人は、婿取り娘である。31歳のある女性の意見を引用する。恋愛結婚よりもお見合い結婚の方が婿養子を取りやすいといえると思います。また、「取り子取り嫁」というものもありますがこれもお見合いの方がまとまりやすいと思います。「取り子取り嫁」など大昔の風習かと思っていましたが、現実に私と同じ年齢の女性二人がそれによって結婚しました。（一人は恋愛、一人はお見合いでした）「取り子取り嫁」というのは、結婚する際、他方が名前を変えて、とだえていた家の名を継ぐことです。例えば、母親が女の姉妹ばかりで母の実家の名を継ぐ者がいない場合、その母親の子供がその名を継ぐというものです。例えば：



仲人の役割

現代、恋愛結婚を含め、ほとんどの結婚に仲人は不可欠である。仲人には、式での媒酌を行なう「頼まれ仲人」と見合いの縁談を持ち込む「橋かけ仲人」の二つのタイプがある。（昔はこの二つの仲人に区別がなかったと言う人もいるし、これらを区別する定規があったと言う人もいる。）

「頼まれ仲人」と「橋かけ仲人」の決定的な違いは、結婚した後にある。「頼まれ仲人」は、結婚した二人の面倒をずっとみていかなくてはならない。場合によっては、夫婦間の

争議や、離婚の仲裁も行なう。仲人には、年賀状、暑中見舞、御中元、御歳暮、を送る習慣がある。

通常、「頼まれ仲人」は親類や、新郎の勤め先の上司の中で信頼できる人にお願いする。「頼まれ仲人」はお礼として、お金をもらったりするが、その役割は大変困難なものである。次のようなことわざがある。

・仲立ちより逆立ち　（利害や立場の違う二者の間に立って双方を満足させなければならぬ仲立ちの苦労はなみたいていでなく、逆立ちするほうがまだ楽であるの意。）

・仲人は草鞋千足　（仲人は縁談をまとめるために、双方の間を行ったり来たり何度も足を運ぶので、履物を何足もはきつぶすほど大変だということ。）

仲人の概念は奈良時代に中国から伝えられてきた。しかし、江戸時代に武士が、同身分の結婚相手を探す手段として仲人をたてるまで、一般的ではなかった。さらに明治時代になると、平民の間でも広く利用されていった。それ以前は、若者組か年長の親類がこうした役割を担っていた。

過去と現代のお見合い

1868年の明治維新以前、日本では、一夫多妻制度が認められていた。正妻が夫を満足させられなかった場合、夫は何人でも合法的に妻を囲うことができた。それに対し女性は、結婚した後は、夫に貞節をつくさなくてはならなかった。小さい時期から、服従が第一の義務であると教育されてきた。まず第一に父親に対し、次に夫と夫の親に対し言うことをきかなくてはならなかった。さらに、未亡人となった時には、息子の言うこともきかなくてはならなかった。（この妾の制度は1882年まで合法的に行なわれてきた。）彼女らの身分は、正妻とその子供より低かった。結婚の目的は家系を永続させていくためのもので、性欲を満足させるものではなかった。男性は芸者と遊ぶことによって性欲を満たすことができた。数多くの芸者の存在根拠はここにある。かごから着物の袖を優美に振る女らしい仕種、あるいは、繊細な歌が人を引き付けたその昔、貴族や高い位の武士の間では、恋愛事件がしばしば起きた。

明治維新以前、平民の結婚方法と武士の結婚方法は全く異なった。平民の結婚は、恋愛に基づいて、自由に行なわれた。当の二人が結婚することを決めると、地元の若者組のメンバーが両家に結婚の許可を得に行った。この場合、「仲人の役割」は、見合い結婚での仲人の役割と比べ、形式的なものであった。

一方、武士の結婚はこれと全く違う。家系や家柄を永続させるために、同身分の家族と

[1] 故事ことわざ刊行会　1992　「事故ことわざ新辞典」　東京：三興出版　p. 283, 286

結婚の契約を結んだ。こうした結婚においては、しばしば仲人を必要とした。なぜなら、通常、結婚相手の家族は遠く離れた所に住んでおり、お互いの家に対し面識がない場合が多かったからである。婚約中の男女とはいえ、結婚するまで相手のことを少ししか知っていない場合や、全く知らない場合もあった。

しかし第二次世界大戦の終わりまでには、身分による結婚方法の違いはなくなった。（身分制度自体、この時には崩壊していた。）新しく便利な交通システムのおかげで、地方に住んでいる人も、仲人を仲介させることで、他の地方の人と結婚することができるようになった。また大都市では、恋愛結婚が増加していった。西欧風の恋愛と結婚観念を表現する新聞、雑誌、本、映画などの増加と読み書き能力ができる人の数が増すことで、日本人の結婚に対する考え方が徐々に変わり始めた。そして結婚に幸福を求める思想が定着し始めた。

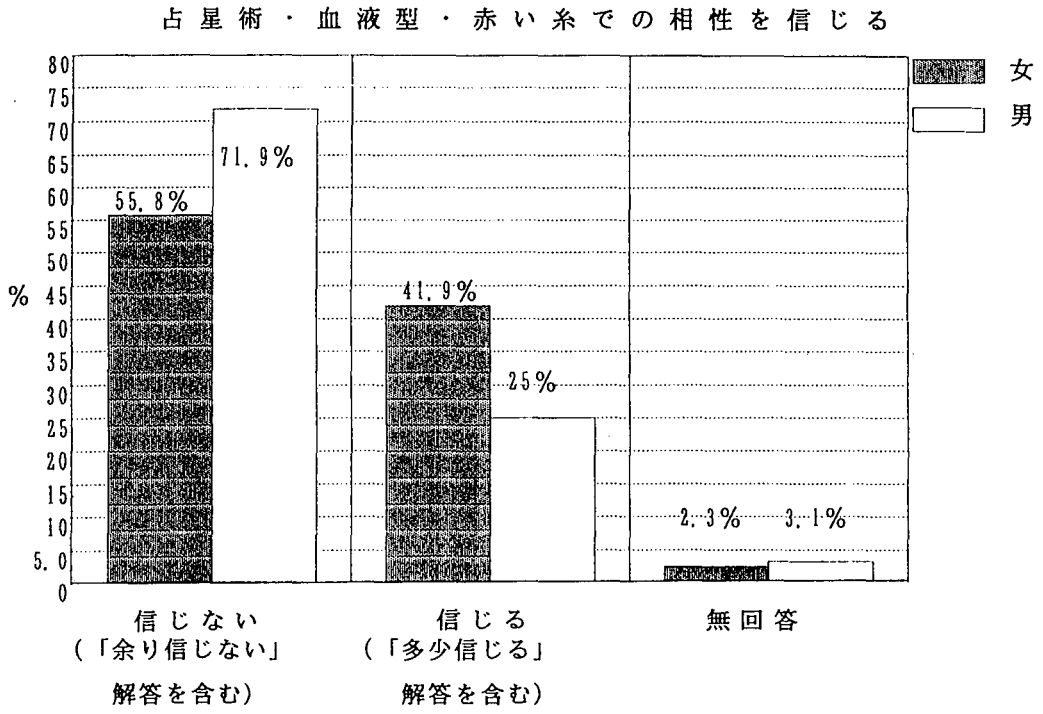
<u>迷信</u>

「．．．雪子が未年の生まれであることであった。一般に丙午をこそ嫌うけれども未年の生まれを嫌う迷信は、関東あたりにはないことなので、東京の人達は奇異に感じるであろうが、関西では、未年の女は運が悪い、縁遠いなどと云い、殊に町人の女房には忌んだ方がよいとされているらしく、「未年の女は門に立つな」と云う諺まであって、町人の多い大阪では昔から嫌う風があるので、ほんに雪子ちゃんの縁遠いのもそのせいかも知れないなどと、本家の姉は云い云いした。」

昔は縁起をかついで、見合いをする日は大安、先勝などの吉日を選ぶのがならわしだったが、今は当事者の都合を第一に考える。一般的に見合いが行なわれるのは仕事に支障のない土曜、日曜、祝日などである。

「出会いと結婚」という名のサイン誌（学習研究社）の7月号で「〝赤い糸〟伝説は本当にある！皇太子殿下と雅子さまも運命の糸に導かれていた」という記事が出ていた。けれども、運命の出会いを結ぶ「赤い糸」は本当にあるのでしょうか？私が行なったアンケートでは、全体的に、女性の方が「占星術」「血液型」での相性と「赤い糸伝説」というものを男性より強く信じている傾向にあった。また、アンケートでは、男性の9.4％と女性の29.1％は「赤い糸伝説」を信じているが、30歳以上のグループにおいては男性の92.3％

と女性の82.1%はこの伝説を信じていない。下に書いたグラフを見て下さい。



<u>お見合いのタブー</u>

またこの「細雪」の中で、主人公の姉妹の一人である雪子は、数えきれないほどの見合いにもかかわらず婚期を過ぎ、三十歳になっていた。これは、蒔岡家が雪子の見合い相手を選ぶ時に条件を多く付けすぎたことや、雪子の左眼に時々できる隈などが、原因であった。年が過ぎるに従って、雪子の妹の婚期も遅れていった。姉より先に妹が結婚することは、許されなかったからである。

私の父は、ニュージーランドで生まれた中国系二世です。父は六男ですが兄弟の中で一番先に結婚し、更に悪いことに、白人と結婚した。そのために、祖父は父を勘当した。しかし、兄が生まれると祖父は父を許した。兄は唯一「イー」という姓を継ぐ孫なのである。けれども六男でありながら最初に結婚した父は、他の兄弟の結婚式（見合い結婚）に参列することは認められなかった。国際結婚を絶対反対する日本人はまだいる。けれども、時代は段々変わってきている。「お互い理解すれば、国際結婚は本来良いことですが、言葉や文化などに関する限りでは問題になる」というのが、アンケートでの共通意見でした。

結婚は血統を結合することを意味し、ほとんどの日本人は国際結婚の問題より彼らの血統が遺伝病に感染しないかどうか、血統の悪い家と結婚しないかどうかを気にしているのではなかろうか。てんかん、神経症や精神障害などはまだ特に恐れられている。谷崎はこ

のことを「細雪」[1]で例証している。瀬越のお母さんは精神病だと聞いたので雪子の縁談を断った。ヘンドリ[2]は日本で精神病、遺伝病を家族にもつ人のために断種と堕胎は法律で許されているという事に触れた。また、犯罪の経歴を持つ親類がいれば、これも結婚する見込が少ない。けれども、鍋がどんなにゆがんで、ひびの入ったものでも必ず合う蓋があるように、仲人の手助けにより、欠陥のある男女でも良縁をえることができる。

かつて見合い結婚では、身分、政治、宗教、財産のすべてが、影響を及ぼした。以前と違って今日は財産がそんなに重要ではないというアンケート解答者もいたし、数人の大都市に住んでいる母親は、もし娘が、農家に嫁ついだら、農作業をしなくてはならないということを心配すると言った。結婚前に相手方家族の経歴をこっそり調べるプロの探偵を雇う場合もある。しかし現在、自分の戸籍以外に他の戸籍抄本をもらうことは禁止されている。なぜかというと「プライバシー」のためである。もちろん、戸籍とは、前の離婚、私生児、若死など詳細を含めるが、この禁止の理由は、部落差別を根絶しようというところにある。昔の戸籍では、名前の後に、士族・平民・新平民という身分階級が記入されていたと言われている。現在こうした記入は行なわれていない。また、昔の戸籍を洗うことも禁止されている。多くの日本人は、偏見を持っていないし、部落に対して差別意識を持っていないと言うが、「結婚」となると昔からの偏見はなかなか消えない。

お見合いと恋愛についての討論

前に結婚相手を選ぶ際、見合い結婚と恋愛結婚は二通りの方法だと述べたが、実際にこの二つに分類することはなかなか難しい。ある主婦は、結婚は見合いのだと言っているが、主人は、恋愛結婚だと主張しているという例である。この区別はどんなに不明でも、まだ日本語に残っている。

老練と尊敬された仲人と相談して、親の選んだ結婚相手は成功の見込みが十分あることを大抵信じていると言われている。けれども、時代の日本の若い人達は、機会があれば恋愛結婚したいようである。アンケート対象者全体の中で、53.3%が見合いを経験したことがない。この人達に次のような質問をしてみた。

お見合いをしてみたいと思いますか。

YES

女	男
63.9%	50.0%

お見合いしてみたいと思う理由は？

	女	男
一度は体験してみたい	59%	28%
沢山の人々と巡り合うチャンス	15.4%	35.8%
理由がない	10.3%	14.2%
その他	5%	--
無回答	10.3%	21.4%

[1] 谷崎潤一郎　1955　「細雪」上巻　東京：新湖社　p.97

[2] HENDRY, Joy 1981 "Marriage in Changing Japan" Charles E Tuttle Co. Inc p.135

「一度は体験してみたい」という女性のグループにおいては、13%がもう恋愛結婚している。面白いのは、見合いしたくない人達の意見である。「恥ずかしいから」「してみたい気はするけど、見合い結婚はしたくないので中途半端な興味本位の気持ちで見合いするのは相手に失礼だからしない」などで、見合いしてみたいという理由は、「いろいろな人と巡り合うチャンスがあるし、私は見合い以外、結婚できそうにないから」「もし、30歳くらいになってもまだ結婚相手が見つかっていなければ異性と出会えるチャンスだから」などである。

お見合いしてみたくないと思う理由は？

	女	男
自分で相手を探したいから	27.3%	35.7%
いやだから	18.2%	35.7%
まだ結婚したくない／まだ早いから	27.3%	21.5%
好きな人がいるから	18.2%	--
理由がない	4.5%	7.1%
その他	4.5%	--

結婚するかしないかは別として、現代の若者は、異性との出会いの場として、わりと肯定的である。この点は、ただ見合いのメリットの一つである。「おいしいものが食べられる」と答えた女子学生がいたが、大変面白い答えである。

お見合いのメリットは何だと思いますか。

・相手の職業、年収、学歴、素性などが全て分かるから安心できる	35.8%
・新しい出会いのチャンス	32.5%
・パートナーがいない人も結婚できる	14.2%
・親を含め周囲の反対がない	5.0%
・結婚までの準備期間が短い	2.5%
・結婚後恋愛ができる	1.7%

お見合いのデメリットは何だと思いますか。

・相手の性格がよく分からない	43.3%
・断りづらい	8.3%
・自分にプレッシャーが多い	5.8%
・交際期間が短い	4.2%
・周りがうるさい	2.5%
・お金がかかる	1.7%
・愛情が少ない	1.7%

アンケートによれば、若者の多くは、見合いについて、恋愛結婚ができなかった時の「頼みの綱」と考えているようである。結婚して始めて、一人前と認められる日本社会において、独身者（半人前）は結婚に対する社会的圧力を受ける。そして、そこには、恋愛結婚と見合い結婚の二つの選択しかない。目にみえない成文法のようなものである。しかし、外国のように、日本でも、結婚せずに、独身でいることを好む人もいるのである。この社会的圧力は、見合い結婚と恋愛結婚に大きな影響を与える。時代の流れにより結婚観も変わって来たが、恋愛に関する限りでは、この「社会的圧力」は障害となると思う。日本のお年寄り達の恋愛観と西洋における恋愛観を比べると、ずいぶん違うことに気付くでしょう。その原因の一つは、日本語の「恋愛」という言葉は、性的意味合いが強いということである。なぜ日本のお年寄りは恋愛に基づいた結婚について疑いを持っているかということについては、こうした理由から説明することができる。「見合いと恋愛」という題で、いろいろな考え方がある。例えば：

「見合い結婚は、最初は冷めているが後から熱くなる。一方恋愛結婚は、最初熱く、後から冷めていく」

「情熱的に寄り添う二人は、涙をも共にする」

「急いでした結婚は後から悔やむことになる」

西洋人の見地からすれば、一般的に恋愛結婚にはもっと深い意味がある。もちろん、性的魅力は重要ですが、もっと重要のは、相手が自分の最高の親友であるということ。相手を信頼し、苦楽を共にする。しかし自立はしている人（あなたがいなくても生きていけるが、あなたと一緒にいたいという意味）。結婚を成功させる要素は「チームワーク」だろう。この言葉は経済的意味だけで用いるのではなくお互いに真の幸福を得ることをも意味する。そして、いくつかの見合いでは、こういう真の幸福が不足していると思う。ただ経済的理由や慣れ合いから、相手と不幸に死ぬまで一緒に暮らすことは、人生における失敗だと私は思う。人生は非常に短いものであるが、私としては、心から真の幸福と思えないものであれば満足できない。幸福というものを、ある程度自分の手で掴むことができると考えているからである。私は、毎日を限りある人生の一日として生きていきたいと考えている。

日本の若い人の多くは恋愛結婚を希望する傾向にあるが、日本の社会では、結婚前の同棲に対して否定的である。西洋人の多くは、同棲に対し肯定的で、相手をもっとよく知るために重要なことであると考えている。日本人でも同棲する人はいるが、世間体を気にし、それぞれが別のアパートを借り、お金を無駄使いする。

一般論として恋愛と見合いの優劣をつけることはできない。なぜなら、第一に人は、それぞれ独自の考え、信念を持っているからである。見合い結婚では、愛を徐々にはぐくんでいく。また恋愛結婚は愛が徐々に冷めていく傾向にあると思われる。もう一つの理由は、人々が、結婚に対して、何を本当に求めているかである。結婚についての理想は人それぞ

異なり、パートナーの関係に払われる努力もこれと相対的なものである。下の表を見て下さい。結婚の目的に関するアンケート結果である。

結婚の目的は何だと思いますか。	男	女
・子供を作る／子孫を残す	32.4%	23.3%
・信頼できるパートナーを得る／人生のパートナーを得る	26.5%	32.6%
・人生を充実させるため／人生一人では生きていけない	26.5%	19.8%
・心の安定を求めること	17.6%	12.8%
・社会的地位が認められる	8.8%(全部19-24歳)	---
・幸福の追求	8.8%	4.7%
・幸せな家庭生活	5.9%	6.9%
・形式	---	3.7%

同じ質問を外国人に行なってみた。だいたい同じような解答であったが、解答の中で、「愛情」という言葉が沢山使われた点で違いがあった。半数以上の解答は、文化の違いから見合い結婚の概念を理解することは難しいと言った。ただ、見合いで、愛してもない人と結婚するということに関しては、理解できなかったと言っている。しかし日本人の若い人の考え方は彼らの親の世代と比べ、かなり西洋的である。「私は両親を見ていて、なぜこの二人が結婚したのか理解できないでいる。だから、結婚にどんな意味があるのか分からない。恋愛は好きだけれど、結婚なんて、絶対しない」、これはある女子学生の言葉である。私達は周りからの影響を受けやすい．結婚に対する考え方も、それが見合いであろうが恋愛出あろうが特に問題でなく、身近かな例からそれを肯定的にも否定的にもとることができるのである。

参考文献

・朝日新聞社　1993　朝日ワンテーママガジン⑤　「平成夫婦進化論」　東京

・BAKER, Margaret　1977　"Wedding Customs and Folklore"　New Jersey: Rowman & Littlefield

・BEFU, Harumi　1971　「日本の文化人類学」　Chandler Publishing Co

・CHAMBERLAIN, Basil Hall　1971　"Japanese Things -Being Notes on Various Subjects Connected With Japan"　Charles E Tuttle Co

・FRÉDÉRIC, Louis　1972　"Daily Life In Japan (At the Time of the Samurai) 1185-1603"　Translated by Eileen M Lowe　George Allen & Unwin Ltd

・HENDRY, Joy　1981　"Marriage in Changing Japan"　Tokyo:Charles E Tuttle Co

・井田良彦　1986　「見合い・結納・結婚のマナー」　東京：株式会社

・木村尚三郎　1987　「日本のすべて」　三菱自動車工業株式会社入事部

・故事ことわざ刊行会　1992　「故事ことわざ新辞典」　東京：三興出版

・LEBRA, Takie Sugiyama　1984　"Japanese Women"　Honolulu:University of Hawaii Press

・ムアー、ＣＡ論　1967　「日本人のこころ－日本の哲学と文化のあり方」　Honolulu:University of Hawaii Press

・日本文化研究所（訳編者）　1977　「日本についての100章」

・日本人研究会編　1975　「日本人研究－No3特集－女が考えていること」

・「日本タテヨコ」　1985　Japan:Gakken

・サイン-7月号　1993　「出会いと結婚」　東京：学習研究社

・SEGALEN, Martine　1980　"Mari et Femme Dans la Société Paysanne"　「妻と夫の社会史」　日本：片岡辛彦監訳

・祖父江孝男編　1987　「日本人はどう変わったのか（戦後から現代へ）」

・谷崎潤一郎　1955　「細雪」上　東京：株式会社　新潮社

・WORLD FELLOWSHIP COMMITTEE OF THE TOKYO YOUNG WOMENS' CHRISTIAN ASSOCIATION　1955　"Japanese Etiquette - An Introduction"　Japan